

ふ。往昔金剛寺は、久保市乙劍神社の別當所に而互利也。法住坊は金剛寺の坊中にて、數坊ありしかど亂世の頃悉く退轉し、僅に法住坊一坊のみ残りたり。故に金剛寺法住坊と稱すといへり。然るに明治維新の初め、神佛混淆御廢止に付き、明治元年十二月法住坊復飾して、久保市金悟と改稱して神職と成り、久保市山金剛寺法住坊の號を廢し、本尊不動尊等をば取除け、其の以來の佛穢を清淨になしたりけり。

○久保市來歴

舊傳に云ふ。往昔は此の地邊小坂の庄内にて、久保市といふ村落ありて、乙劍神社は則ち當村の産土神也。故に今に至り久保市乙劍宮と呼べりと。彼の社記に云ふ。昔は乙劍宮とて甚だ繁昌して拜參人常に絶えず。故に近郷より諸色諸品を持出で、社邊に市を建てたり。此市場をば諸人窪市と呼べり。とあり。是のかみよりの古傳説を載せたるものなりいへり。富田景周の白山三宮古記考に云ふ相傳。在昔自石川郡窪邑商商民來御山。乙劍社畔設市塵販物。故有此名。今猶金府中以尾張町新町中町等。稱久保市分也。

るは久安村なり。寶永元年舊蹟取調書に、石川郡久安村領内に御館と云處有之、昔富樫の亭有之由申傳へたりと。三州志古墟考に、或は云ふ、久安村領に富樫泰高の下第ありて、泉石造成の別莊を置くと云ふ。とあり。されば久保村は久安村の誤りなる事いぢるし。加賀古跡考に、久安村昔は久保の文字を書けりといへれど、此は證とするに足らず。久安村も富樫の庄内なれど、窪村と餘程隔りたれば、富樫泰高窪村の邑民をして、尾山の麓へ交易をなさしむべきよしなし。此は全く久保市の地名に據りて、久保村より出で市をなし、市場よりして久保市の地名起り、遂に一村落と成りたりとの附會よりしていへるものなるべし。久保市の地名は、既に白山三宮古記正和元年の條に、山崎 凹市と見ゆ、白山莊嚴講中記録享祿四年十月の條に、山崎 窪市とも載せたり。此の舊記共にて見れば、往古は凹市或は窪市と書きたりし事知られけり。正和は花園天皇の御世にて、後醍醐天皇の以前なれば、富樫泰高の時より二百年許前なり。久保氏の地名、その古き事はにていぢるし。おもふに富樫泰高久安村に居て、その邑民を久保市の地へ出し交

と見ゆ、金澤事蹟必録に、昔久保市といひしは、今金澤城追手口の尾坂下より、尾張町・彦三町邊へかけて久保市といふ地也といひ傳へたり。そのかみ富樫泰高、長享二年高尾落城の後、石川郡野市に居館を構へ、其近邊久保村に下屋敷を構へて居られけり。泰高其性甚だ利を食る人にて、さまざまの課役をあてたれども尙足らず。其頃一向道場尾山の御堂は、日々參詣人群をなして繁昌なれば、久保村の民人に仰せて、魚鳥・野菜等の諸色を、尾山の麓へ運び遣し賣鬻きて、交易の市をなさしめ、其市の利益を取られけり。此市場をば人呼びて久保市といへり。然るに市場の掛作り、年を逐うて次第に建てひろがり、一村と成り、久保市村と號せりと。又云ふ。昔富樫守護の時分、石川郡久保村の邊に市場あり。後此所の市を尾山の城下へ移し、小坂の庄内に置けり。故に今の新町邊を久保市の郷と云ふ。今新町の水溜に市場制札あり。といへり。平次按ずるに、右富田氏の三宮古記考にいへる石川郡窪邑は、高澤氏の金澤事蹟必録にいへる久保村と同村にて、富樫の庄内なる窪村也。此の邑名往古は久保と書けり。但し富樫泰高の下邸あ

易をなさしめたる事、若し實説ならば、久保市の地は元より市場なりし故ならんか。久保市の地名は、もと市塵を建てたりしゆを起りたるなるべし。清少納言の枕草子に、市は、辰の市。つば市は大和にあまたある中に、長谷寺にまうづる人の必ずそこにとまりければ、觀音の御縁あるにや。心ことなるなり。と記載す。花鳥餘情に、參長谷寺。午時至椿市。令交易御明灯心器等云々。など見ゆたれば、此なる久保市も長谷の椿市と同じく、尾山御堂の佛道繁昌をたのみて建てたる市場なれども、天正八年に柴田勝家のため尾山落城し、本源寺の尾山御堂も絶えたるゆゑ、久保市の市場も共に衰微して、遂に廢絶したるならん。昔は石川郡鶴來の市日の如く、諸國共に毎月市日を定めて、其の日市塵を建てたりとぞ。源平盛衰記卷十九に、近江國蒲生郡の八日市とて、遙の市より重荷を負はせて歸らんすれば云々。甲陽軍鑑卷廿に、三日市場とて日、市の立辻に落書を立つる。など、見ゆたり。今諸國の邑名などに、一日市・二日市・三日市・四日市或は五日市・六日市・七日市など呼べるもの、皆いにしへ日、市を建てたる地なり。また彼の長谷の椿